

2020年度 日本緑化工学会賞 講評

今年度の選考では、本年2月に刊行された学会誌45巻3号に受賞候補者の推薦依頼が掲載され、本年5月15日まで推薦を受け付けました。推薦された候補者について学会賞選考委員会で慎重な審議を行い、研究奨励賞1名、技術奨励賞3名、功績賞1名に授与することとしました。

受賞理由は以下のとおりです。

研究奨励賞

受賞者：宮崎直美 氏

題目：北海道十勝地方の都市人工林における在来草本・木本の再生・更新過程に関する一連の研究

宮崎氏は100年計画で都市林を育成している都市公園「帯広の森」において、植栽後30年余りの植生の再生・更新過程の研究を行ってきました。樹木の更新を妨げるミヤコザサの繁茂を春季の林床の光環境を暗く調節することで抑制できること、木本実生の定着には光環境以外の阻害要因が存在することを明らかにし、今後取り組むべき課題を示しました。また、林内に自然侵入する若齢木個体の樹齢を簡易に推定する方法を開発しました。これらの知見は自然林を模した樹林地を造成する上で非常に有用であると評価され、今後の研究の発展も期待されます。これらのことから、宮崎氏への研究奨励賞授与を決定しました。

技術奨励賞

受賞者：寺本行芳 氏

題目：荒廃地等における表層土の安定性予測技術と植生による減災効果の検証

寺本氏は表層崩壊発生後の植生や土壌の変化を詳細に調査し、表層土の発達速度から表層土層の安定性の限界点について明らかにしてきました。この成果は、植生の減災効果を踏まえた荒廃地の浸食崩壊に対する新たな保全技術の開発に有益であると評価されます。また、寺本氏は植物の根系が城の石垣内部へ侵入することによる石垣崩壊誘因の危険性について調査し、文化史跡等に関する適切な保存管理方法についても提案しています。この成果は、緑化・自然再生技術を新たな分野において応用展開したものです。これらの成果を総合的に評価し、寺本氏への技術奨励賞授与を決定しました。

技術奨励賞

受賞者：伊東日向 氏

題目：海岸林の構成樹種における発芽から稚樹段階の耐塩性評価

伊東氏は我が国の代表的な海岸林の構成樹種の耐塩性評価を苗木の水耕栽培により行い、樹種特性を明らかにする一方で、今後の耐塩性評価法改良の方向性も示しています。また、クロマツ種子の短期的塩水浸漬が発芽に影響しないものの発芽後の生育に影響を及ぼすことなどを明らかにしました。これらの知見は、持続可能な海岸林緑化技術の開発に不可欠であり、海岸緑化技術の向上に資するものであると評価されます。また、今後の研究の発展も期待されます。これらのことから、伊東氏への技術奨励賞授与を決定しました。

技術奨励賞

受賞者：小野幸菜 氏

題目：自然回復緑化および在来植物種子の最適な取り扱いに関する技術開発

小野氏は、種子採取、貯蔵の開発に携わり、在来木本植物種子の発芽検定法や種子保存法の開発を行い、在来木本植物の安定供給に関する研究に取り組んできました。また、緑化施工地周辺で採取した現地採取種子を保存して吹付工事に使用する先進的な、かつ、手間のかかる実証研究を積極的に実施するなど、将来性の高い技術開発に取り組んできました。これらは、地域の生態系に配慮した自然回復緑化に対する社会的要求が高まる中で、極めて有益な成果であると評価されますので、小野氏への技術奨励賞授与を決定しました。

功績賞

受賞者：増田拓朗 氏

題目：四国香川における都市緑化、里山～里海の保全活動の展開

増田氏は1978年に香川大学に着任して以来、緑化教育や緑化の普及に貢献し、特に四国香川での緑化活動の主導的な立場で活躍しています。本学会においては、道路法面の植生、土壌改良資材、緑化植物の生理特性など、現在の緑化技術の礎となる多様な研究を展開する一方、学会運営の面では学術国際交流部会長として貢献しました。増田氏は現在、ボランティア団体代表として里山整備活動や自然観察・森林浴等の支援を行うほか、かがわ「里海」づくり協議会座長として、環境や生物多様性の保全などの活動に関わっています。以上のとおり、緑化学への貢献が顕著なので、増田氏への功績賞の授与を決定しました。